The Cultural History of Smell

コンスタンス・クラッセン　デイヴィッド・ハウズ　アンソニー・シノット 著　時田正博 訳

aroma

アローマ

匂いの文化史

Chikuma-Shobo

コンスタンス・クラッセン　デイヴィッド・ハウス　アニック・ガーニノット　著　鳥田正博

アロマ

匂い文化史

江苏工业学院图书馆
藏书章

Chikuma-Shobo

・**訳者**　時田正博

1950年生まれ。オーストラリア・メルボルン在住。賞罰なし。

コンスタンス・クラッセン＋ディヴィッド・ハウズ＋アンソニー・シノット

アローマ：匂いの文化史

時田正博（訳）

✂

1997年2月20日　初版第1刷発行

✂

発行者　柏原成光

発行所　株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3
郵便番号　111-91
振替　00160-8-4123

✂

印刷・製本　厚徳社・積信堂

✂

©1997 Masahiro Tokita ISBN4-480-85744-3 C0039

✂

ご注文・お問い合わせ，及び乱丁・落丁本の交換は下記宛へ。
〒331 大宮市櫛引町2-604 筑摩書房サービスセンター
TEL　048-651-0053

c o n t e n t s

緒言……3

序　匂いの意味と力……5

i　失われた匂いを求めて

1　古代の香り……20

バラ油・シナモン・没薬……21

都市の匂い……25

家の匂い……26

香りに満ちた饗宴……29

パレードと香料……37

キスの香り……39

悪臭の中……43

匂いの階級……48

戦闘の臭い……55

香りによる治療……58

死の匂い……59

香料と神々……63

形而上の香り……66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2 香りを追って［中世から近代へ］……81
聖性の香り……82
都市の悪臭……85
ペストとポマンダー……91
ホーム、スイートホーム……97
晩餐の香り……102
香る身体……108
香りへの賛歌……113
嗅覚革命……120
想像の香り……129
匂いと科学……134

ii 嗅覚の差異

3 匂いの宇宙……150
香りの暦▼時間の芳香……150
香りのする地図▼香景……152
匂いのタイプ▼嗅覚の分類……155
食べられる匂い▼食べ物の匂い……161
匂いについて語る▼言語のなかの匂い……166

自己の匂い▶匂いとアイデンティティー……171
事物の匂い(秩序)▶オスモロジー……174
色・響き・匂い▶感覚の結びつき……177

4 匂いの儀礼……187

ジャスミンの匂い▶匂いの美学……188
神々のためのタバコ▶匂いによる霊との交流……194
白檀・砂糖・鶏の爪▶匂いの通過儀礼……199
ヤム芋の鼻▶狩猟採集の匂い……205
薬剤と薬草吸入▶アロマテラピー……211
腐った人間の臓器▶儀礼の匂い……215
匂いのある夢▶夢と幻における匂いの役割……220

iii

匂い・権力・社会

5 匂いと権力[匂いをめぐる政治学]……232

性(ジェンダー)のエッセンス……233
階級の匂い・民族の匂い……237
臭いによる汚染……243
アウシュヴィッツの臭い……246
よい香りのコーヒーエア……251

6 商品の香り［香りの商業化］……260
体臭……263
香水……268
香る製品……275
人工香料……281
トレードマークとしての香り……285
嗅覚▼ポストモダンの感覚？……288

参考文献……297
訳者あとがき……315
索引

アロマ 匂いの文化史

The Cultural History of Smell

AROMA : THE CULTURAL HISTORY OF SMELL

by Constance Classen
David Howes
Anthony Synnott

Copyright © 1994 by Constance Classen,
David Howes and Anthony Synnott

Japanese translation rights arranged with Routledge
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

装幀　神田昇和

緒言

本書は、西洋および非西洋諸文化における匂いの社会的役割についての数年にわたる研究をもとにしている。そもそもの発端は、一九八八年から九一年にかけてカナダ・モントリオールのコンコーディア大学で行われた共同研究「知覚経験のバラエティー」で、その後も資料を集めて（本書で活用できたのはそのほんの一部）整理し解釈を加え、研究は続けられた。その間、ニューヨークの嗅覚研究基金からも助成を受けることができた。ここに同基金のアネット・グリーンに感謝の意を表する。本書に述べられた見解はもちろん、すべてわれわれのものである。

コンスタンス・クラッセンは、助言と励ましを頂いたグレゴリー・ボームとライオネル・サンダーズに、この研究と本書の執筆のためのフェローシップを与えてくれたカナダ社会科学人文科学研究評議会に、ハーバード大学世界宗教研究センターのフェローとして研究をすすめることに助力を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

頂いたローレンス・サリヴァンに、それぞれ感謝を表明する。
デイヴィッド・ハウズは、マイクル・ランベック、アラン・コルバン、マーガリート・デュピア、ロブ・シールズ、ゲイル・ガスリー・ヴァラスカキスそれにコンコーディア大学の心理人類学のクラスの学生たちに、励ましと、きわめて建設的な批判を頂いた。感謝する。
アンソニー・シノットは、嗅覚調査にすすんで協力してくれたコンコーディア大学社会学・人類学科の教職員と学生に、この調査で献身的に働いてくれたニコレット・スターキー、原稿をタイプしてくれたキャロル・リチャードスンに感謝する。ヘレン・トビンにも特別の感謝を捧げる。
出版原稿の整理に協力頂いたジョージ・クラッセン、それにクリス・ロジェックとルートレッジ出版の編集者諸氏にもご支援とご指導を賜った。それぞれここに感謝の意を表明する。
各章の執筆分担について申し添えると、第1章と第2章はコンスタンス・クラッセンが自身の研究に基づき執筆した。残りの章は共同で執筆したが、第6章はコンスタンス・クラッセンとデイヴィッド・ハウズの'L'arôme de la marchandise', *Anthropologie et Sociétés*, 1994, vol. 18, no. 3を英語にしたものである。

† 本文［　］内は訳者による註

序：匂いの意味と力

匂いには、力がある。匂いは身体・心理・社会の各レベルで作用する。しかし、ふつうはとくに匂いを意識することはなく、嗅覚が障害を受けて、匂いがなければ健康で幸福だと感じることもできないということが、はじめてわかる。頭に傷害を受け、嗅覚を失ったある男性はこう述べる。

> まるで目が見えなくなったみたいでね。風味がほとんどなくなっちゃいましたから。風味はほとんどが匂いや香りだということを、みんな気がつかないんでしょう。人間も匂いがするし、意識的にではないでしょうが、本の匂いもかぐし、町の匂いもかぎ、春になれば春の匂いをかいでいるんですよ。そうしたことは日常生活の豊かな背景になっているんじゃないでしょうか。匂いを失ったときから、私の世界はいっぺんに貧しくなってしまいました。[1]

コンコーディア大学のアンソニー・シノットは二七〇人の学生と教職員を対象に、それぞれの

暮らしの中の匂いの役割についてたずねた。[2]「好きな匂いは？」という質問に対し、さまざまな回答が寄せられた。「赤ちゃんの匂い」「刈りたての芝生」「バラ」「手作りのパン」といったものから「モントリオール・オリンピック・スタジアムの匂い」「汗」「犬」「ガソリン」のような思いがけないものまで。

「嫌いな臭い」もさまざまで、「バスに乗り合わせた男性の強い体臭」「養豚場・養鶏場」「タバコの煙」「病院」「生肉」など。多くの人が香水は好ましいと答えたが、嫌いな人もかなりいて、「頭痛がして吐き気を覚える」女性や「くしゃみが出る」人など、肉体的な苦痛を感じる人もある。他は、香水は自然の匂いを隠し、感覚全体を鈍くすることを嫌いな理由にあげた。[3]

匂いは、強い感情的な反応を呼び起こす。よい思い出と結びついた匂いは、よろこびの感情をたちまち呼び起こすし、いやな臭いや悪い思い出と結びついた匂いをかげば、気分が悪くなる。回答者は、匂いの好悪の理由の多くは、それが好きになった、あるいは嫌いになったときの感情によるとする。その結びつきの強さは、不快とされる臭いをよい匂いと思ったり、好ましいはずの匂いがおぞましくなったりするほどである。ガソリンはふつうよい匂いとはされないが、「車で行ける場所、これまでに行った場所を思い起こさせる、つまり自由を感じさせるから好き」という人もあり、自分の好きなスポーツの試合が行われるスポーツスタジアムの匂いが好きな人もある。メロン、にんじん、花などふつう好ましいとされる匂いも、いやな思い出と結びつくと嫌われる。

父が二年前に亡くなって遺影の前にそなえた花の匂いをかぐと、今でも悲しくなり落ち込

んでしまう。母がすごく泣いたことを思い出すからいやです。

匂いを感じることは匂いを知覚するだけでなく、その匂いと結びついた経験や感情を思い出すことでもある。[4]

匂いは、人間関係でも欠かせない役割を果たす。「さわったり、匂いをかいだりしなくては、ほんとうに感情的な絆は結べないと思う。愛するもののなかに自分の鼻を埋めるようにして匂いをかいでこそ、そのひとと結び合える」と答えた人もあった。じっさい、赤ちゃんは生まれてすぐに母親の匂いを識別し、おとなでも子供や配偶者をその匂いでかぎ分ける。ある実験は、配偶者のティーシャツを匂いだけで当てることができることを明らかにした。[5] 実験に参加した人たちは、匂いで家族を識別できるということは、おそらく考えていなかったろうが、実験の結果は、意識はされていなくても、匂いはちゃんと頭の中に入っていることを示した。

このように感情や知覚に重要なものでありながら、匂いはしかし近代西欧ではおそらくもっとも評価の低い感覚である。[6] その理由としてよくあげられるのは、動物における嗅覚の重要性に比べ、人間の嗅覚は退化し貧弱だということだ。人間の嗅覚はある種の動物の嗅覚とは比較にならないことは事実だが、それでもかなり鋭い。われわれの鼻は数千種の匂いをかぎ分け、ごくごくわずかの量でも匂いを感じることができるのである。

しかし、匂いはきわめてとらえどころのない現象で、少なくともヨーロッパ諸語では、色などと違って名づけようもなく、説明するときには匂いの体験を手探りして「……のような匂い」と喩えるしかない。匂いは写真やビデオなどの記録にとどめることもできず、うまく捕えることも、

長期にわたって保管することもできない。匂いは結局、記憶と文字による記述に頼らざるを得ないのである。

これまでの嗅覚研究は、身体的・科学的な研究だった。嗅覚の生物学的・化学的性質についての理解はかなり進んだが、基本的な問題の多くにまだはっきりした解答が与えられていない。匂いは一つの知覚なのか、それとも二つの知覚なのか、つまり人は匂いそのものを知覚するのか、それとも空気によって運ばれる化学物質にも反応するのか。匂いに反応する器官は鼻だけか。匂いを客観的に計測計量する方法は、などなど。心理学的研究もかなりあり、仕事の能率、気分、ダイエットなどに匂いはどんな影響を与えるか、さまざまな実験や研究が行われた。[7]

しかし、匂いはただ単に身体的・心理的な現象ではなく、文化的であり、したがって社会的また歴史的な現象である。[8] さまざまな社会で匂いは文化的価値を担い、世界を定義するモデル、世界と交流するための手段となっている。さらに匂いの経験は個人的な感情に強く彩られており、また価値観の一部に組み込まれた匂いは社会の成員の内面深く入っていく。匂いの文化史的研究は、したがって人間の文化の本質＝エッセンスへの探究となる。

今日の西洋で匂いが不評なのは、十八、十九世紀の哲学者・科学者による五感の再評価の結果である。かれらは、視覚は理性と文明にとって最もすぐれた感覚とし、嗅覚は狂気と野蛮の感覚であると断定した。ダーウィンやフロイトは、人間の進化にともない嗅覚は後退し視覚が優先したと主張し、[9] 近代において嗅覚が大切だとするものは、進化の遅れた野蛮人、堕落した貧民、変質者、狂人、痴人の仲間とみなされた。

ヨーロッパの知的エリートによる嗅覚の蔑視は長く効力を保ち、嗅覚の地位は低くとどめられ

た。匂いは近代では「黙らされて」きたのである。匂いがめずらしく一般的なディスコースの対象、例えば小説のテーマになった場合でも、道徳的・精神的な堕落と結びついたステレオタイプとして表現されてしまう。

爆発的な人気をえた、パトリック・ジュースキントの『香水』では、嗅覚の鋭い主人公ジャン＝バティスト・グルヌイユは、痴人かつ変質者であり、しかも「堕落した」下層階級の出身なのだ。グルヌイユは甘い芳香を嗅ぎつくすために処女を殺し続け、異常な情熱を満たすが、それによって魅力的な香りを身につけるに至り、最後はその香りに惹きつけられ興奮した群衆に引きちぎられ、喰われてしまう。[10]

『香水』が豊かな読書体験をもたらすとすれば、特異なテーマや読者をひきつけて離さない語り口もさることながら、獲物をかぎつける偏執狂、かぐわしくも不運な処女、本能的に嗅覚の鋭い危険な野蛮人という、これまでも読者に人気のあった嗅覚のステレオタイプがまだまだ生命を失っていないことを保証してくれたためだ。この理由のほうがより本質的だろう。

匂いや嗅覚がこのようにおとしめられ、抑圧されてきたのは、なぜだろうか。それは、ある文化の中で組織的に抑圧される要素は劣っているだけでなく、社会秩序に脅威を与えると考えられているせいである。では、なぜ匂いの意識が高められると西洋近代の社会秩序に危険となったのだろうか。

まず近代以前の西洋では、匂いは内的な真理を顕すもの、内的なエッセンスと考えられた。視覚を通じて表面を認識し、匂いを通じて内面と交流したのである。そもそも匂いは簡単に貯蔵保管することはできず、境界を越えて逃げ去り、ほかの感覚とも融合し、べつの経験になってしま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com